バカとけいおん！と召喚獣

直井刹那

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
バカとけいおん！と召喚獣

【Ｎコード】
Ｎ４０５０Ｚ

【作者名】
直井刹那

【あらすじ】
バカテスの文月学園にけいおん！のメンバーたちが入ってきて、オリ主や明久たちバカテスキャラと軽音部で学園生活を過ごしていく物語です。

この物語の設定？

この物語は『バカとテストと召喚獣』の二次創作です。
また『けいおん！』とのクロスものです
オリ主が幼馴染の明久ともう１人の幼馴染と
秀吉、雄二、ムッリーニ等のＦクラスメンバーやＡクラスメンバーと
そしてけいおん！の唯・澪・律・紬や憂・和・梓たちと
楽しく可笑しく毎日を過ごしていく物語です。
バカテスとけいおん！の話を混ぜながらの話になります。
また、この物語は明久たちが入学してからの物語になります。
１年次はけいおん！メインの物語で、
２年次からバカテスメインにしていきたいと思っています。

物語設定？

この物語は『バカとテストと召喚獣』と
『けいおん！』のクロスものです

設定
・オリ主が明久たちバカテスメンバーと
けいおん！メンバーと文月学園にて日々を送っていきます。
・明久はもちろんの事、観察処分者です。
・オリ主と明久が軽音部に入部します。

原作との変更点
・明久は姫路に恋心を抱いていない
・開始が2年時ではなく1年時からになってます。
なのでオリ話になる可能性があります。
・また、1年時はけいおん！メインでいき、
2年時からバカテスメインになります。

また書いているうちに変更する場合があります。
それでも良い方は呼んで頂けると嬉しいです

プロローグ　天然さんとの出会い

まだ肌寒い3月。俺達はとある高校に向かって歩いてた。

智也「……」

陽一「ハァ…」

智也「……」

陽一「ふぅ…」

明久「……」

陽一「ああぁ…」

智也「…おい」

陽一「…なに？」

智也「さっきからうるさいんだけど」

俺は隣りを歩く俺の悪友である『春原陽一』に向かって言う。

陽一「しかたねェじゃん！！緊張してんだから！！
心臓が破裂しそうな勢いなんだよ！！
だから緊張してんだよ！ビビってんだよ！」

智也「…落ち着けよ。日本語がおかしいぞ。

あと急にテンションあげんな…かなりウザいから」

陽一「ウザいとか言うなよ！傷つくだろ！！
……はぁ。つうか、なんでお前そんなに落ち着いてんの？
今日が何の日か分かってるのか？」

明久「高校の合格発表の日だよね」

そう。今日は文月学園の合格発表の日だ。

陽一「そうだよ！なのにアナタたちはそんなに落ち着いてるんですか！？
フツー緊張するもんでしょうが！！」

智也「俺はお前と違って受かる自信あるしな。
それに明久を見てみろコイツだって落ち着いてるだろうが」

陽一「うわッ！ウゼェ！ってなんで明久も落ち着いてるんだ？
明久だってあまり成績良くないだろ？こっち側でしょうが！？」

明久「まぁそうだけど…ここまできたら腹くくるしかないしね」

智也「明久だってこうなんだぞ。ほら、さっさっと行くぞ」

陽一「ハァ。あいよ…」

今日は俺達が受験した高校の合格発表の日だ。
多くの中学生達が歓喜に湧いたり、悲しみに涙する日である。
だから普通は陽一のように緊張するんだろうが、（コイツの場合は

異常だが…）
俺は普通に合格できる範囲だったし、
試験も解けたから大丈夫という自信がある。
そんなことを考えてたら高校に着いた。
陽一「やべ～着いちまったよ。ヤバいよ？マジヤバいよ！！」
智也「何がヤバいんだ。いいかげんハラくくれバカ」
明久「そうだよ。それに大丈夫だよ。
　僕達智也に教えてもらったんだから大丈夫だよ」
今回の受験のために明久と陽一は智也に勉強を教えてもらっていた。
自慢じゃないが中学の時は成績は上位だったからな。

流石に合格発表の日とあって学生が多い。
おそらく合格したんだろう、友達同士抱き合って喜んでいる者、
嬉し涙を流している者、ケータイで笑顔で
電話している者などがそこにはいた。
陽一「なぁ智也君お願いがあるんだけど…」
智也「……なんだよ？気持ち悪いな」
陽一「俺の代わりに合否を見てきてくれッ！」
智也「はぁ？何でだよ？自分で見ろよ」

陽一「極度の緊張により足が動きません…」

智也「お前どんだけビビってんだよ
　……バカなこと言ってないで行くぞ、明久手伝え」

明久「うん」

ガシッ！×2

ズリズリ…

陽一「ちょっ！？やめ、離せ！」

バカなことを言っているアホの襟首を掴んで無理矢理、
合格発表が行われている掲示板に引きずっていく。

パッ

ドゴォ！

陽一「うげッ！！」

掲示板に着いたので今まで引きずっていた陽一（バカ）を離す。

陽一「何すんだテメェ！！イテェじゃねェか！！」

智也「うるせェな。わざとだ。それにここまで運んでやったんだ、
　感謝されこそすれ恨まれる筋合いはねェぞ」

となりでまだギャーギャー言ってるバカを放って俺は掲示板を覗く。

智也「さて俺の番号はっと…」

俺の番号は１６７番だ

智也「おっ　あったあった」

掲示板には俺の番号が書かれてあった。

智也「やっぱ受かってたな」

俺が思っていた通り、見事に合格していた。

智也「…で？お前らはどうだったんだ？」

明久「と、智也！僕も受かってたよ！！」

智也「お、良かったな明久」

明久「智也が勉強教えてくれたおかげだよ」

智也「で、陽一は？」

陽一「…まだ見てない…」

智也「早くしろよ」

陽一「…怖いっす…」

智也「このビビりめ…」

陽一「頼むよ？一生のお願いだッ！俺の変わりに見てくれ！！」

智也「……こんなので一生の願いなんてするなよ。
まぁ土下座でもしたら見てやってもー…」

俺は悪ふざけでそういうと

ガバッ

陽一「お願いします」

その場で土下座するアホ。
こいつにはプライドはないのか…

明久「・・・本当に土下座してるよ」

智也「本当にするなよ……わかった…見るから、土下座やめろ
俺たちがハズかしいから」

陽一「サンキュー…流石、俺の親友だ――――」

智也「そんな風に思ってんのお前だけだから」

明久「だね」

陽一「…ひどッ！！」

さて、コイツは受かってんのかね…

陽一の番号を探す…確か番号は１５９番だな。

番号を探す…

……

ポンッ

智也「…陽一」

陽一の肩に手を置き、神妙な顔で俺は告げる。

陽一「ど、どうだった…？」

明久「智也、どうだったの？」

智也「……あのな…非常に言いづらいんだが……お前は…」

陽一「…な、なに…？」

明久「え？」

智也「…残念ながら……受かってたぞ……」

陽一「…そっかぁ…ダメだったか…まぁ仕方がないよな……これも運命……って受かってんのかよ！！！！」

智也「おおー見事なノリツッコミだな。さすが陽一（バカ）だ」

陽一「なんでそんな紛らわしいことすんだよッ！！！てゆうか『残念ながら』っなんだ！！」

智也「そんなの決まってるだろ。面白いからしかないだろ！それに残念なのは俺だ。またお前と一緒なんだから」

陽一「お前最低だな！！」

智也「まぁ落ち着け。良かったじゃねェか無事合格出来て」

陽一「ぐッ…まぁね…そっか合格したんだ俺……良かった……良かったよ！智也くん！！」

明久「良かったね陽一」

バッ！

急にバカが俺に抱き付こうとしたので俺は…

ドゴォ！！！！

陽一「ぶバァ！！！」

渾身の回し蹴りを放ってやった。

陽一「イテェじゃねーか！」

智也「気持ちわりィ事してんじゃねェよ……アホが」

男に抱き付かれる趣味はねェ。

さて、そろそろ退散するか。

何やら今の一件で目立ってしまったようだ。

俺が騒いでいるバカを置いて帰ろうとすると、

後ろから突然声を掛けられた。

唯「あの、すいません！け、結果発表、一緒に見てくれませんか！？」

振り返ると、若干癖毛気味の少女がいた。

智也「……はぁ？何で？」

唯「じ、実は・・・一緒に来てくれるはずの友達が風邪で
　来れなくなって妹も用事で来れなくなっちゃったんです・・・。
」

少女は暗い顔でそういう。

智也「そうか……分かった。

一緒に見てやるからそんな顔すんなって」
さすがにそんな顔されたら断りにくいしな。
唯「ほ、ほんとですか！？」
智也「あぁ。ほんとだ」
陽一「ねぇ僕の時と対応違わない？」
智也「気のせいだ」
明久「気にせいだよ」
陽一「いや、気のせいじゃ―うべっ」
俺は陽一を黙らせて（腹を殴り気絶させて）
智也「じゃあ、ちょっと一緒に見てくるから
明久この陽一（バカ）のこと頼むわ」
明久「わかった。じゃあ陽一連れて先に帰るね」
智也「悪いな。じゃあまたな」
明久「うん、じゃあね」
俺はそういうと癖毛気味の少女のところへ向かう。
陽一は明久に頼みつれて帰ってもらうことした。
居ても皆さんの邪魔にしかならないからな。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・

智也「ほら、せーので見るからな」

唯&智也「「せーの！」」

自分の番号でもないのに一瞬、ドキッとする。

唯「あ、あった！やったー！！！
　あ、そうだ。自己紹介遅れました！
　私、平沢唯です。唯って呼んでください！」

智也「俺は中川智也だ。よろしくな平沢」

さすがに初対面の人間を名前で呼ぶのはな………

唯「トモ君だね！！！」

アレェ？いきなり下の名前で？しかももうあだ名かよ。
ちょっとハズかしいんだけど……

そこへ1人の女の子が駆け寄ってくるのが見えた。

憂「お姉ちゃん！」

唯「あ、憂だ～！」

智也「……妹さんか？」

憂「用事早く済んだんだ。お姉ちゃん、この人は？」

唯「あ、紹介するね。掲示板一緒に見てくれたトモ君だよ！」

憂「お姉ちゃんがお世話になりました。トモさん」

智也「いや、別に俺は何もしていないよ。
　それと俺の名前は中川智也っていうんだ。よろしく」

憂「あ、失礼しました。智也さん。よろしくお願いします。
　お姉ちゃん、あだ名付けるのが好きなんです！」

そうなのか？
ハズかしいからやめてほしいんだが

唯「トモ君、メアド交換しようよ！」

智也「トモ君はやめろ。ハズかしいから。まぁメアド交換はかまわないが」

唯「えぇ～。可愛いのに」

可愛いってあまりうれしくないな……。

憂「私もいいですか？」

メアド送信&受信完了。

憂「あの～、よろしければ智也さんも一緒に夕飯どうですか？
　といっても、レストランなんですけど・・・。」

唯「とってもおいしいんだよ！一押しなんだよ！」

う～ん、どうするかな。

でも、何かアレだな。

さすがにそれは気まずいな・・・。

智也「・・・遠慮しとくよ。家族でごゆっくり・・・」

唯「えぇぇ～～！！！」

俺が断ろうとすると平沢姉が声をあげる。

憂「お姉ちゃん、無理言ったらだめよ」

妹は必死に姉を宥めている。余計、断り辛い・・・。

智也「わ、わかった。目線痛いから、そんな顔するな！」

憂「え？良いんですか？智也さんはご家族とは予定ないんですか？」

智也「あぁ両親は海外で仕事してて俺、１人暮らしなんだ。

だから別にかまわないんだが良いのか俺なんかがお邪魔して」

さすがに今さっき知り合った人間が
いきなりご家族と食事なんて少し気まずいからな。

憂「それは大丈夫ですよ」

～平沢家一押しのレストラン～

平沢・父「智也君も大変だね」

智也「い、いえ・・・でももう慣れてましたから」

憂「あ、お姉ちゃん！口にソースが・・・。」

唯「え、どこどこ？」

憂「動かないでお姉ちゃん！」

唯「ありがと、憂～♪」

本当にできた妹さんだな。

結局、俺は平沢姉妹と一緒に食事に行く事になり、ご馳走にまでなった。

キャラ紹介（1）

中川智也（なかがわともや）

性別：男

誕生日：9月10日（乙女座）

身長：182cm

得意教科：英語・数学

苦手教科：古典

趣味：読書・ゲーム・バスケ・音楽鑑賞・演奏（ギターやベース）

特技：料理（明久にはかなわない）・ギターとベース・バスケ

外見：見た目はクラナドの岡崎朋也で、髪の色・目の色は黒、左眉に切傷痕があるので見た目はヤンキー。

性格：中身は家庭的で、女心にも疎い朴念仁。だが、変な所で鋭い。

また、温厚で面倒見も良く陽気な性格であり友達思い。そして負けず嫌い。

・運動神経がよく、中学時代はバスケ部の部長だった。

・運動神経がいいため雄二並の武力を持つ。

また、成績も優秀で中学時代では常に上位をキープしていた。よって文武両道。

・明久と陽一とは幼稚園からの付き合い。

・食べる事が好きで鞄の中にお菓子を常備している。

だが、味覚はお子様で酸っぱい物やワサビが苦手。

寿司屋ではサビ抜きでいつも頼んでいる。

・両親は海外にて仕事をしているので1人暮らし中。

☆使用楽器

ギター：ホライゾン

春原陽一（すのはらよういち）

性別：男
誕生日：２月１７日（水瓶座）
身長：１６７ｃｍ
得意教科：保健体育
苦手教科：保健体育以外の全て
趣味：読書・ゲーム・サッカー
特技：サッカー
外見：クラナドの春原陽平
性格：陽気な性格であり友達思いで、家族思い。

・サッカー部の先輩が、同級生をいじめている現場を発見し、
それを助けるが、暴力を使ったため退部した。
このため運動神経だけは優れている。
・不良として悪名が立っているが事を荒立てることを嫌うので、
周囲からは「ヘタレ」のレッテルを貼られ、
不用意な言動が原因で他者から痛い目に遭わされたり、
いらぬ誤解をされることが多い。
しかし心身とも丈夫で立ち直りは早い。
・智也と明久とは幼稚園からの付き合い。
・元々黒の頭髪を染髪して金髪にしている。
鉄人によく注意されているが本人は直す気は無い。
・妹の芽衣に対しては普段邪険に扱っているが、大切に思っている。家族思い。
・異性に対する興味が旺盛で、魅力的な女子を見つけてはすぐナンパしたがる。
しかし成功した試しは今だなし。
・勉強は苦手だが、関心事に対する集中力には目を見張るところがある。

キャラ紹介（1）（後書き）

皆さんの感想お待ちしています。

入学式の朝

桜の季節の４月某日。
中学の制服の学ランとは違い、ブレザーを着た俺がそこに映っていた。
俺は鏡の前で自分の姿を確認する。
智也「…よしっ」

まだ着慣れない高校の制服だが、まぁ其の内慣れるだろう。

智也「…しかし相変わらずの面だな…」

俺は顔にコンプレックスを抱えている。
顔というよりは『目』だな。俺は『ツリ目』なのだ。
さらに小学校のときに怪我をして左眉のところに傷が少しある。
なのでヤンキーと間違えられていたりする。
最初の頃は髪を伸ばして傷を隠していたが
鬱陶しいのもあり、今では何もしていないが……

智也「そうだ。明久に電話してみるか。
　　なんとなくまだアイツ寝てそうだし」

俺は明久のことが気になり電話をかけてみる。

プルルルルル

ガチャ

明久「はぃ、もひもひ、吉井ですけど……」

智也「おはよう明久。今起きたみたいだな」

明久「ん？あれ？智也どうしたの？」

智也「いや、お前の事だから寝坊するんじゃないかと思ってな」

明久「え？って、えぇ！？もうこんな時間なの！？
智也ありがとう！電話もらってなきゃ寝坊するところだったよ」

智也「じゃあ、起きた事だし入学式の時ぐらいは遅刻するなよ。
……あとおそらくないと思うが間違っても姉の制服着てくるなよ」

明久「そんな間違いするわけ・・・・・・ナイジャナイカ」

智也「おい、今の間は何だ？しかも最後なんで棒読みなんだ？」

明久「えっと昨日準備していた制服が姉さんの制服だった・・・・・・」

智也「さっそくじゃないか！？
一応言っておくが俺達の制服はブレザーだからな」

明久「う、うん。ちゃんと確認してから着るよ」
智也「じゃあ、また学園でな。遅刻するなよ」
明久「うん。じゃあ、また学園で」
俺は電話をきる。
智也「さてっと、俺もそろそろ行くか。」
―今日は高校の入学式だ―
途中でコンビニに寄り、カフェオレとパンを買い、店を出ると…

タッタッタッタッ

智也「ん？」
足音か…？　音がする方に視線を向けると…
智也「平沢？」
視線の先には平沢がこちらに向かって走ってきていた。
そして俺に気付く事もなく通り過ぎて行った。
智也「どうしたんだあいつ？あんなに急いで」
時計でも見間違えて、遅刻だと思ったのか？まさかな。

・・・・・・明久や陽一みたいなヤツはそうそういないよな。

学校に近付くにつれ、段々と学生の数が増えていく。
歩いていると校門に着いた。
そして同時に見知った人物も見つけた。

その見知った人物『平沢』は、ぼーっと突っ立って校舎を眺めていた。
周りの上級生や新入生はそんな彼女を一瞥し、過ぎ去って行く。
あんな場所（校門のど真ん中）に立っていられたら
皆の邪魔になるので声を掛ける事にした。

智也「おはよう平沢」

唯「ん？　あっ！トモ君！！おはよう！！」

声掛けるとこちらを向き、途端笑顔になる平沢。

智也「校舎見上げて何してたんだ？」

唯「いやぁ？恥ずかしいんだけど時計、見間違えちゃって……」

智也「ん？どういう事だ？」

ま、まさか・・・・・・

唯「朝起きて時計みたときね、『遅刻だぁ！』って
思って急いで学校に向かったんだ」

智也「……」

唯「んで　学校に着いて時間確認したら、
『あれっ！？時間見間違えたぁ！？』って思って
ぼーっとしてたんだぁ。いやっ～お恥ずかしい」

そう言って頭をかく平沢。

（マジか…まさかあの２人と同じようなヤツがいるとは）

唯「どうしたの？トモ君？」

俺が黙ったままだったので、顔を覗き込んでそう尋ねる平沢。

智也「気にするな。ちょっと考え事をしてたんだ」

唯「そうなんだぁ」

智也「クラス分け、もう発表されてるんだろ？さっさと見に行こうぜ」

唯「うん！　そうだね♪」

俺は平沢と一緒にクラス分けを見に行こうとすると

？？？「唯？」

と誰かが平沢を呼ぶ声がした。

唯「あっ！和ちゃん♪」

『和ちゃん』と呼ばれた平沢よりも短い髪に眼鏡をかけた女子が俺達に向かって歩いて来た。

智也「知り合いか？」

唯「うん！そうだよ！友達なんだ」

和「珍しいわね。唯が私より先に学校に来るなんて」

唯「いや～はははは…ま、まぁねぇ～」

『時計を見間違えて早く来た』とは言えないよな。
平沢は冷や汗をかきながら曖昧に返事をしている。

和「ねぇ　唯、この人は？」

『和ちゃん』と言われる女性が俺の方を向き平沢に尋ねてきた。
そりゃ当然の疑問だよな。
友達の横に見知らぬ人物が居ればそういう質問になるよな。
しかも俺の見た目はヤンキーみたいだからな。

俺が自己紹介しようとすると

和「もしかして、あなたがトモ君？」

智也「えっ！？」

何で俺の事知ってんだ！？まさかエスパーか！？
しかもトモ君呼ばわり！？やめて！恥ずかしいから！！

唯「うん！そうだよ、この人がトモ君だよ」

智也「えぇっと和さんだっけ？なんで俺の事知ってるんだ？
それとトモ君はやめてくれ。かなり恥ずかしいから」

唯「あぁゴメンなさい。唯から聞いてね。
『新しい友達が出来たんだ』って」

智也（なるほどな、平沢から伝わったわけか。）

そう思い、平沢に視線を向けると…

唯「えへへ」

と嬉しそうな笑顔を浮かべていた。
そんな顔されるとこちらが照れるじゃないか

和「じゃあ自己紹介するわね。真鍋　和です　唯とは幼馴染みなの」

唯「私達ずっと一緒なんだよ」

幼馴染みか、俺と明久、陽一みたいなもんか。
……いや　あの陽一（バカ）と一緒にされたら可哀相だな。

智也「俺の事は平沢から聞いてると思うが…
中川智也だ。これからよろしくな」

和「ええ、こちらこそよろしくね」

入学式の朝（後書き）

和ちゃん登場です！

皆さんの感想お待ちしています

入学式の朝　～バカ登場～

俺達が互いに自己紹介を終えようとしたとき

陽一「そして俺が智也の親友の春原陽一！ヨロシク！！」

朝からテンションの高いバカが出現した。

唯・和「「わっ！！」」

急に出てきたバカに驚く平沢と真鍋。

コイツは必要な時には出てこず、全く必要ない時に出て来るな……

智也「お前どっから湧いて出てきた？」

陽一「ヒドいな。人を虫みたいにいうなんて傷つくじゃないか」

智也「いや、お前は虫じゃないだろ」

陽一「当たり前だ」

智也「お前と虫が一緒なんて虫が可哀想だろうが」

陽一「え！？ナニソレ。虫の心配！？俺虫以下なの！？」

智也「なに当たり前なこと言ってんだよ」

陽一「当たり前なのか！？アナタヒドイよ！！」

智也「デケェ声出すな、うるせェしウザいキモイいし」

陽一「そうさせたのアナタでしょうが！！
楽しいか！？こんなことして楽しいのか！？
ってキモいってなんだよ！！」

智也「非常に楽しい。お前をからかうことが俺の生きがいだ」

陽一「最悪だァ！！！コイツ！！！」

そう言って頭を抱える虫以下の生物。

……あぁ楽しいなぁ。

さてコイツをからかうのはこれくらいにするか、
合格発表のとき同様、周囲からの視線が痛いし……

それに……

唯・和「「……」」

平沢と真鍋がポカンと口を開けていた。

和「……えーっとその人は？」

と真鍋から質問が来た。

智也「コイツは一応俺の……友達なのかな？いや、悪友か？」

陽一「一応ってなんだよ。しかも何故、疑問系だ…しかも悪友ってなんだよ」

未だに頭を抱えている陽一が先ほどとは真逆のテンションで呟くように俺に言ってきた。

智也「そっちのほうが面白いからな」

陽一「アナタ、本当に最低ですよね」

智也（大丈夫。こんなことするのはお前だけだから）

あえて口にはしないが……

明久「智也！陽一！おはよう！」

そこで明久も合流した。

智也「おはよう俺の親友の明久」

陽一「って明久は親友で僕は悪友なのかよ」

智也「当たり前だろ」

陽一「コイツ本当に最低だ！！」

明久「ねぇ智也？この人たちは？」

智也「あぁ1人は明久も見たことあると思うが、

合格発表の日、一緒に見た平沢で、こちらは平沢の幼馴染の

真鍋だ」

明久「あ、初めまして吉井明久です。よろしくね」

唯「あっ私は平沢唯だよ」

和「真鍋和です」

明久とついでに陽一に自己紹介をする2人。
すると頭を抱えていた修司は立ち上がり。

陽一「春原陽一です！智也とは親友やってます！」

満面の笑みで本日二度目の自己紹介という快挙を成し遂げた。

唯「うん！よろしくね明久君、陽一君！」

和「よろしく」

陽一「ヨロシク！唯ちゃん、和ちゃん」

明久「よろしくね平沢さん、真鍋さん」

さっきはあんなにヘコんでたというのにすぐさま元のテンションに戻る。
……切り替え早ェな
しかも陽一はいきなり名前で呼んでるし・・・・・

唯「明久君と陽一君は、トモ君とはいつからの付き合いなの？」

おい、陽一のまえで『トモ君』って呼ぶなよ…
絶対このバカにからかわれる。

明久「僕と智也と陽一は幼稚園からの幼馴染みなんだよ」

陽一「そうなんだよね」

唯「へ？そうなんだ。私と和ちゃんも幼馴染みなんだよ」

陽一「そうなんだ？」

智也（あれ？　気付いてない？）

呑気に平沢と会話をする陽一。
コイツがバカでアホで良かった…

唯「そういえばトモ君と一緒にクラス分け見に行くんだった。
せっかくだし皆で行こうよ」

智也「そうだな」

陽一「トモ君？」

げぇ！？気づいた！？

唯「うんっ『智也君』だから『トモ君』」

陽一「トモ君……トモ君……クッ……クックッ……
……アッハッハハハハハハハ！！！
何？お前、唯ちゃんから『トモ君』って……ハッハッ！！

……って呼ばれてんの！？
アッハッハハハハハハハ！！！！」
腹を抱えながら俺に指をさし、大笑いする陽一。
唯「？」
平沢は状況が分かってない様子。
智也「……」
そして黙ったままの俺。
明久「陽一、そろそろ笑うのやめないと僕知らないよ」
陽一「アッハッハハハハハハ！！！！
ヤベぇ笑いすぎて腹イテェ」

そろそろ黙らせるか……

グッ

体の重心を少し落とし…
そして左足を軸足にし、右足を振りぬく！
智也「消し飛べ！！！！」
ドゴォン！！

陽一「あぶらッ！！！」

陽一の腹に蹴りをいれる。

３メートル近く吹っ飛びピクリとも動かなくなる陽一。

唯「えっ！？」

絶叫する平沢と

和「やり過ぎなんじゃないの？」

あくまで冷静な真鍋。

明久「だから言ったのに」

智也「大丈夫だろアイツなら。

……ほらいい加減クラス分け見に行こうぜ」

和「そうね…行くわよ、唯」

吹っ飛んだ陽一の方を眺めている平沢に声をかける真鍋。

『そうね』ってなかなかいい性格してるな、真鍋は…

唯「えっ！？陽一君はどうするの！？」

智也「１人になりたいんだって」

唯「う、うん…そうなんだ」

陽一をそのまま放置し、俺達はようやく、学校内へと歩き出した。

クラス分けの結果は

平沢と真鍋とも同じクラスになった。

……ついでに陽一のヤツとも同じだが……。

明久とは別のクラスになってしまった。

１―Ａ

春原陽一・中川智也・平沢唯・真鍋和

１―Ｃ

秋山澪・木下優子・霧島翔子・琴吹紬・田井中律・姫路瑞希

１―Ｄ

木下秀吉・坂本雄二・島田美波・土屋康太・吉井明久

という風になった。（あいうえお順にて記載）

初日は簡単な自己紹介で終わった。

入学式の朝　～バカ登場～（後書き）

最後にバカテスメンバーとけいおん！の
メンバーの1年次のクラス分けをしてみました。
愛子は転校してくるのでいません。

皆さんの感想お待ちしています

雄二たちとの出会い（1）

～1－Aの教室・放課後～

入学して2週間が過ぎた。部活はまだ検討中・・・・・・。

そんな事を考えていると真鍋たちの話し声が聞こえた。

和「唯、まだ部活に入ってないの？」

唯「何かしなくちゃいけないとは思ってるんだけど・・・。」

和「はぁ・・・こうやってニートが出来上がっていくのね・・・。」

智也「・・・さすがにオーバーじゃないか？」

ってかもしそうなら俺もニートの一員ではないのか？

唯「トモ君は部活決めたの？」

智也「俺もまだ決めてない」

和「……アナタもなの？」

何その視線は・・・そんな目で俺を見ないでくれ

智也「でもまぁバスケ部にでも入ろうかなとは思ってるがな」

和「バスケ部に？」

智也「そう。だけどここってそこまでバスケ強くないから迷ってるんだよ」

和「確かにここのバスケ部が強いなんて聞かないわね」

智也「だろ。だからまだ検討中なんだ」

俺は話をきりあげると帰り支度を済ませる。
陽一のバカはどこかに行ってるから明久と帰るかな。

～1－Dの教室・放課後～

雄二「やれやれ……やってもいないことに文句ばかり抜かしやがって」

雄二は中学の頃は悪鬼羅刹と呼ばれていて少し性格が悪い。

雄二は廊下を独りぐちる。
そして1人で帰り支度をすませていると、

雄二「っと、と・・・・・・」

誰かの机にぶつかり中に入っていた教科書が落ちてしまった。

雄二「この時期からもうこのザマとは勉強熱心なヤツだな」

とりあえず雄二は落としてしまった教科書を拾おうと手を伸ばす。
そしてその惨状に気がついた。

雄二「・・・これは酷いものだな・・・・・・」

そこには表紙は破れ、ページはぐちゃぐちゃになっていた。
新品で受け取ったばかりなので普通に使用していればまずはこうならない。

雄二はその教科書を拾い裏表紙を見ると
そこには『島田美波』と名前が書かれているのがわかった。
彼女はドイツからの帰国子女でまだ日本語が上手く言えないみたいだった。

雄二「そういえばあいつ、初日にクラスの連中を『ブタ』呼ばわりしてたっけ」

おそろく本人は意味をよく理解せずに言ったのだろうが、
それに腹立てた連中がやったんだろうな・・・

雄二「・・・・・・まぁいいか。俺には関係のない事だ」

雄二はそれをしばらく観察してから、机の中に戻そうとする。

その時だった

雄二「っ！？」

目の端に高速で動く何かが映った。
頭が判断する前に体が勝手に反応し、その場から大きく飛びのく。
間一髪で回避が間に合い、目の前の誰かの拳が通過する。
この時点でようやく、誰かが俺に殴りかかってきた、ということを理解した。
雄二は体勢を立て直し、拳の主を見る。

そこには

明久「・・・・・・・・・・・・」

雄二とは入学初日から因縁のある人物だった。

雄二「どういうつもりだ、テメェ」

雄二は静かに明久に問いかける。
2人は互いを快く思っていなかった。
雄二は明久のバカさ加減が気に入らず、
明久は入学式の時、雄二がある女性に話しかけられても無視し続けたので、
理由を聞こうとして、入学式初日から騒ぎを起こしたりしている。

明久「……なに……やってんだよ……」

雄二「それを聞きたいのはこっちのほう――」

明久「オマエ、その子の席で何やってるんだって聞いてるんだよ！」

いつものマヌケな姿からは想像つかないような怒鳴り声をあげる明久。

その視線は雄二の右手へと向いていた。
・・・・・・正しくは雄二の持ってるボロボロの教科書へと。
雄二の脳内では今の状況を整理していた。
雄二の右手のボロボロの教科書・無人の教室
校内に流れる雄二の風評・吉井の先ほどの台詞
それらから思い浮かぶ１つの結論。
雄二「・・・ま、まさか・・・・・・おい待て吉井。俺は」
明久「歯を食いしばりやがれこのクズ野郎っ！」
雄二「チッ、このバカ野郎が・・・・・・！
落ち着け！これは俺がやったわけじゃねぇ！」
明久「ブチ殺す！」
雄二「人の話を聞きやがれ！」
明久は完全に雄二の話を聞いてない。
雄二「なら、ちょっくら相手してやらぁ！」
と、雄二の言葉をかわきりに殴り合いが始まる。
明久「……絶対に……ぶっ飛ばす……！」
雄二「しつけぇな！まだやんのかよ！」

雄二は明久と殴りあいながら明久の事を考えていた。

雄二（なんでコイツは、諦めないんだ……？
俺とコイツじゃ、どっちが強いなんて一目瞭然だろ）

雄二の思っている通り、雄二に比べ明久のほうが傷が多かった。

雄二「いい加減にしろ、クソバカ野郎が！」

雄二は明久と戦いながら小学校の頃の苦い思い出が蘇る。

明久「……可哀想……じゃんかよ……」

雄二「あァ！？」

雄二は一瞬何を言ってるのかわからず聞き返す。

明久「可哀想だと思わないのかよ！あの子は日本に来て
知り合いがいなくて、言葉がわからないのに、
それでも1人で頑張っているんだぞ！
どうしてそんな頑張っている子を虐めるんだよ！」

ボロボロのはずの明久は、力の籠もった声でそう言った。

雄二はそんな明久を見て前にも同じような状況を見ている気がした。

――いや、違うか。俺はコイツと違って逃げようと考えた。

雄二は我が身が大事だった。

だが、明久は――

明久「オマエみたいなヤツ許せるもんか！」

ガツン！　と一際大きな音が響いた。

明久は先ほどと比較にならないほどの勢いで吹き飛んだ。

そして雄二も明久の攻撃を食らい視界が揺らぐ

雄二「吉井！そんなに俺が気に入らないのならかかってきやがれ！
２度と立てないくらい殴ってやらぁ！」

明久「言われるまでもない！オマエをぶっ飛ばして後悔させてやる！」

雄二「ごちゃごちゃうるせぇんだよ！この雑魚が！」

そしてお互いの拳が届く距離まで駆け寄ったところで

智也「そこまでだ！」　康太「……そこまで」

明久・雄二「「っ！？」」

突如２人の前に人影が入ってきた。

雄二の前には智也が拳を受け止め、康太は明久の目の前にペン先を向けていた。

雄二「邪魔するな！テメェらには関係ないだろうが！」

康太「……それ以上暴れてもらっては困る」

智也「そうだ。コイツの言うとおりだ」

康太「……カメラが壊れる」

3人「「「……はぁ？」」」

康太の意味の分からない言葉に
雄二と明久だけではなく智也まで疑問符をあげる。
智也はてっきり2人の喧嘩を止める為に手伝ってくれたものかと思っていたのだ。

康太はそういうと教室のスミに行きゴソゴソと何かを取り出した。
……あれはＣＣＤカメラか？でもなんであんな所に？

智也「……まさか盗撮か？」

康太「・・・・・・・・・っ！（ブンブンブン）」

康太はすごい勢いで否定している。

雄二「……けっ。なんだか気が削がれちまった。命拾いしたな吉井」

雄二はそう言うと鞄を肩に担ぎ明久に背を向ける。

明久「待てよこの野郎！」

雄二「ぐがっ！」

明久は帰ろうとする雄二の肩を掴んで殴りつける。

智也「おい！明久落ち着けよ」

雄二「・・・・・・まだ続けたいようだな吉井」

再び一食触発の雰囲気にかわる。

智也「おい、お前らいい加減に――」

俺が2人をとめようとすると

???「キサマら、何をやっとるかっ！」

3人「「「っ！」」」

突如野太い声に阻まれた。

秀吉「どうじゃ？頭は冷えたかの？」

そこには女顔で爺言葉を使う同級生。木下秀吉がいた。

智也「今の声もしかしてオマエか？」

秀吉「どうじゃ？似ておったかの」

一時は秀吉に気をとられていると明久が雄二に殴りかかろうとしていた。

明久「離れて木下さんっ！くたばれ、この――」

雄二「けっ、ホントにしつこい野郎だ――」

智也「お互いいい加減にしとけよ」

ダン！！

俺は2人に前に出て2人の手を掴み床へと叩きつけた。

智也「さっきから言ってるよな。やめろって。ってかなんだこの状況は。
ここが騒がしいから覗いてみたら2人が殴り合ってるし」

明久「智也止めないで！僕はこの外道をブチのめさないといけないから」

雄二「けっ、できるもんならやってみやがれ」

智也「なんだ2人とも、まだやる気なのか？
それなら俺も本気でやらせてもらうが？」

秀吉「まったく・・・・・。理由は知らんが、
教室でコレ以上暴れられるのはワシもクラスメイトとして見逃せん。
事情を聞かせて貰えんじゃろうか」

明久・雄二「「フンっ！」」

智也「すまないな……えっと……」

秀吉「ワシは木下秀吉じゃ」

康太「……土屋康太」

智也「ああ、木下と土屋か。俺は中川智也だ。
こいつ等を止めるのを手伝ってくれてありがとう」

秀吉「よいのじゃ。クラスメイトじゃからのう」

康太「・・・・・・・・自分のためだ」

智也「で、何が原因なんだ？」

だが、２人は何も喋ろうとしなかった。

秀吉「やれやれ参ったのう」

智也「これじゃあサッパリわからないぞ」

康太「・・・・・・・（スッ）」

智也「ん？何だこれは」

康太「・・・・・・・・見るといい」

そんな中、康太はカメラをいじり動画を見せてくれた。

秀吉「・・・・・・・脚しか映っておらぬが？」

智也「・・・・・・・土屋。やっぱり盗撮を」

康太「・・・・・・（ブンブンブン）」

物凄い勢いで否定する康太。

２人も不満気であるが動画を見ることにした。

雄二たちとの出会い（2）

その後、動画を見ていくと放課後教室の掃除をしている時に
島田の教科書が落ちてしまい、掃除している人たちは
話に夢中で気づいていなく、気づいた頃にはすでにボロボロの状況
だった。

康太「・・・・・・これが真相」

康太が画面を操作して画面を消すと、

明久「ごごごごごごごごごめんなさいっ！」

明久が突然雄二に深々と頭を下げ謝りだした。

雄二「なんだ、いきなり」

明久「その、もう、なんてお詫びしていいか・・・・・・！
とにかく坂本君気がすむまで僕を殴って」

雄二「いや。もうお前を殴る場所ねぇし」

明久「あ、そっか。えっと、それなら――」

智也「どうしたんだ明久。突然？」

明久「あ、うん。実は――」

つまり明久は雄二が島田の教科書をボロボロししたと勘違いして

この惨状が出来上がったわけだ。

秀吉「しかし、坂本も坂本じゃな。きちんと説明したら良かったものを。
あの様子じゃと説明しておらぬようじゃのう」

雄二「・・・・・・ふん！」

秀吉「何か事情があったのかのう？」

雄二「お前には言ってもわからねぇよ木下。
んじゃ、用事が済んだから俺は帰るぞ」

明久「あ、うん。また明日、坂本君。それと、本当にゴメン」

雄二「けっ」

雄二は明久に背を向け再び鞄を肩に担ぐ。

明久「ねぇ智也、木下さん。新品の教科書って
どこに行けばもらえるか知ってる？」

智也「新品の教科書か・・・・・・」

秀吉「うん？いや、ワシは全然知らんが」

智也「明久。言っておくが秀吉は男だぞ」

明久「え？」

智也「いや、普通わかるだろ？」

秀吉「中川おぬしはワシが男じゃとわかるのか？」

智也「はぁ？当たり前だろ」

秀吉「よ、良かったのじゃ。
皆、ワシのこと女子じゃと勘違いしておってのう」

智也「大変なんだな木下も。それより教科書だ。土屋はわかるか？」

康太「・・・・・・（フルフル）」

明久「そっか～。購買には売ってないかな？」

智也「購買には売ってないかもな。
もしあったとしてもこの時間だともう閉まってるぞ」

明久「ならコピーして」

秀吉「何枚コピーするつもりじゃ・・・・・・」

康太「・・・・・・そもそもきちんとした教科書にならない」

明久「じゃあ、アイロンをかけるとか」

智也「服じゃないんだから無理だろ」

明久「僕の教科書と入れ替えるとか」

秀吉「配布された日に全員名前を書いたじゃろうが。
お主の名前が残っておっては入れ変えられんぞ」

康太「・・・・・・・根本的に解決していない」

明久「連帯責任で皆の教科書もボロボロにする」

秀吉「確かに島田の教科書は目立たなくなるかもしれんが・・・・・・」

智也「迷惑だろ」

明久「じゃあじゃあ」

雄二「あーもうっ！頭悪いなテメェラは！
んなもん教師に説明すればいいだろうが」

明久「あ、そっか。悪い事してるわけじゃないもんね」

秀吉「そういえばそうじゃな。坂本よ。よく教えてくれたのう」

康太「・・・・・・・盲点だった」

智也「さすが坂本。優しいな（ニヤニヤ）」

雄二（コイツ最初から気づいてやがったな）

明久「あ、坂本君ありがとう。助かったよ」

雄二「・・・・・・」

坂本が教室から出ようと扉に手をかけると

西村「待て、坂本。ここで何をしている」

皆「「「「「っ！？」」」」」

明久「筋肉教師・・・・・」

西村「西村先生と呼ぶ」

やばいな。今の状況は。

今の教室の状況に明久と雄二の傷跡がある。言い逃れはできない。

明久「先生すみませんっ」

西村「むぉっ！？」

そこで明久が上着を脱いで筋肉教師の顔にかぶせる

康太「・・・・・・失礼」

さらに康太がどこからか取り出したケーブルを上着の上から巻きつけ簡単に取れないようにする。

秀吉「今のうちにこっちからにげるのじゃ！」

木下が窓を開けそういう。

が、それは嘘だ。明久たちは扉から脱出し、身を隠す。

俺は囮役をかい、窓から地上に着地し、逃げる。

西村「待て、貴様ら！逃がさんぞ」

筋肉教師はまんまと策にひっかかり俺を追いかける。
俺はそのまま筋肉教師から逃げつけたが、体力が持たずにつかまってしまった。

その後、結局明久たちも捕まったが教科書はなんとかなったみたいだ。

あの後教師が誤って新品の教科書を廃品回収にだしてしまったので、それを明久と雄二が回収車を追いかけなんとか追いついて教科書を手に入れたみたいだ。

その件もあり明久と雄二は仲が良くなり、名前で呼び合うようになった。
もちろん、協力してくれた秀吉や康太。俺とも仲が良くなり名前で呼び合う仲になった。

雄二たちとの出会い（2）（後書き）

今回は雄二たちを登場させました。

長文になったため、2話構成で描いています。

皆さんの感想お待ちしています。

軽音部って何かな？

～後日、Dクラス～

午前の休憩時間

雄二「おい、明久Bクラスのやつらが購買のパンをかけて
　バスケやらないかって言ってるがどうする？」

明久「パン！やるやる。今月は食費がヤバかったんだだから助かるよ」

雄二「ならメンバー集めるか」

康太「・・・・・・手伝う」

秀吉「ワシも参加させてもらおうかの。なにやら楽しそうじゃ」

明久「なら僕は智也に声掛けてくるよ」

雄二「ああ、今日の昼休みだからな」

～Aクラス～

俺は陽一と話をしていた。

智也「そういえば陽一は部活なにかするのか？」

陽一「ん？あー俺は帰宅部だね。いい女探しに行くからな」

智也（あー。コイツらしい理由だな）

陽一「そういうお前は？」

智也「まだ考え中だ。まぁそろそろ決めないとな」

陽一「まぁ智也は頭もいいし、運動も出来るし、音楽も出来るからな。
でもバスケでもするのか？」

智也「まぁやるなら自分の好きなことしたいからな」

俺と陽一が話していると明久がやってきた。

明久「ねぇ智也。今日の昼休み、Bクラスの人たちと
購買部のパンをかけてバスケしない？」

智也「ああ、いいな。乗った。雄二たちもやるんだろ」

明久「うん。あ、陽一もどう？」

陽一「もちろん。僕もやるよ」

明久「じゃあ今日の昼休み体育館だよ」

俺達が会話をしていると今度は平沢が話に入ってきた。

唯「ねぇトモ君、軽音部って何かな？」

智也・明久「「軽音部？」」

なんでいきなり軽音部なんだ？

唯「私ね、軽音部に入部したんだけど何するのかよく分かんないんだぁ」

智也「何するのか分からないのに入部するなよ
…てか軽音部っていったら…ギター弾いたり、ベース弾いたりして、
バンドとか組んだりするところだろ」

陽一「へぇ～」

唯「えっ　ギター…？　バンド…？」

そんな単語がでてくるとは思わなかったみたいな顔をする平沢。
そして陽一お前も知らなかったのか？

唯「えぇ！？そうなの！？私、軽い音楽って書くからてっきり
簡単なことしかとやらないと思ったのに…」

智也「簡単なことってなんだよ？」

唯「口笛とか…」

智也「なんだそのやる気のでない部活」

明久「そうだね」

唯「和ちゃんにも言われた…」

口笛をする部活ってなんだよ…かなりシュールだな。

和「じゃあ　何なら弾けるの？」

俺達の会話を聞いていた真鍋が平沢にそう聞いてきた。

唯「ん？……カ、カスタネット…」

和「…すごく似合うわ…」

智也「……同感」

陽一「カスタネットか凄いね唯ちゃんは」

明久「陽一・・・・・」

なんか1人変な事言ってるがスルーするか

キーン　コーン　カーン　コーン…

休憩時間の終了を告げるチャイムが鳴る。

唯「どうしよう和ちゃん？…」

和「どうしようって言われても…」

智也「大変だな真鍋も……」

平沢は真鍋に泣き付いていた…

明久「じゃあ昼休みに」

智也「おう」

昼休みのバスケはもちろん俺達が勝っておごって貰った。

入部

放課後になり明久が俺を待ってる間に、帰りの支度をしていると…

唯「あの～トモ君、アキ君」

智也「ん？」

明久「え？」

平沢に呼び止められた。

ってかもうトモ君言われるのには慣れた。というかもうあきらめた。

それに何故か明久もアキ君言われてるし

唯「あのね…お願いがあるんだけど…」

智也「……どうしたんだ？」

明久「何かあったの？」

唯「えっとね……軽音部の部室に一緒に行ってもらえないかな？」

今まで俯いていた顔を上げそんなことを言う平沢。

智也「なんで？」

…まぁ理由は想像つくけど。

唯「それは～軽音部に辞めますって言いたいんだけど
…1人じゃ心細いし、軽音部に怖い人がいたら恐いし…」
…やっぱりか…
智也「何で俺たちなんだ？別に悪くないが真鍋に頼めばいいじゃないのか？」
唯「…和ちゃん、生徒会があるからって断られちゃった…
お願いだよ！？トモ君とアキ君しか頼れる人いないんだよ～！」
そう言って俺に泣きながら抱き付いてくる平沢。
智也「って、なんで抱きついて来るんだ！？ひとまず離れろ」
唯「やだっ！一緒に行ってくれなきゃ離さないッ！！」
早いとこ、この状況をなんとかしなければならない。
なぜなら、周囲からの視線が痛いからだ。
俺に泣きながら抱き付く平沢。
その平沢を引き剥がそうとする俺。
更に平沢が「見捨てないで」だの「1人はイヤだ」なんて言うもんだから…
女子A「中川君、平沢さんに何したの？」
女子B「平沢さんかわいそう…泣いてるよ…」

という、俺がまるで悪人の様な誤解をあたえてしまっている…
これ以上「離せ」「イヤだ」の押問答を続けるわけにもいかない。
それに女子に抱き疲れるなんて今までなかったから恥ずかしい。
智也「ってか誰も行かないなんて言ってないだろ。
良いよ。一緒に行ってやるよ」
唯「本当に！？」
明久「優しいね智也は。平沢さん、僕も一緒に行くよ」
先ほどまでの泣顔が嘘の様に途端に笑顔になる。
唯「ありがと、トモ君！アキ君」
俺は泣き止んだ平沢を連れて明久とともに
軽音部の部室である音楽室へと向かった。
～音楽室前～
階段を上って、ようやく音楽室に着いた。
ん？平沢が震えてる？もしかして緊張してるのか
そこで後ろから声がかかる。
律「あなたが平沢唯さん？」

唯「はぁ～びっくりしたぁ～。あ、はい。そうです。」

律「はぁ～～♪ムギ、お茶の準備だ！
いやぁ～、入部希望者が３人も来てくれるなんて♪」

え・・・３人ってことは・・・俺と明久も入ってるのか？

智也「いや、俺は・・・」

明久「え？僕は・・・」

律「さぁ、入った入った！！！」

智也「お～い・・・」

明久「え？え？」

～音楽室～

澪「軽音部へようこそ！」

紬「お待ちしてました～♪」

智也「はぁ」

紬「さぁ、召し上がって♪」

目の前には高級そうな紅茶とお菓子が置いてある。
凄い美味しそうなんだが……

唯「わぁ～凄くおいしそう♪

明久「本当だ美味しそう」

完全に本来の目的を忘れてるよこの人。しかも明久まで。
しかも2人とも幸せそうな顔でケーキを頬張っているし…

智也「はぁ…」

すると部長らしき人物が…

律「食べないの？」

と聞いてきた

紬「もしかして甘いもの苦手だったかしら…？」

といかにもお嬢様みたいな女子が申し訳なさそうな顔をしていた…
そんな顔されたら食べないわけにもいかず…

智也「いや、ちょっと考え事してたんだ。
甘いものは好きだし。じゃあいただきます」

と1口ケーキを口の中に入れると。

智也「…うまっ」

思わず声が出てしまった。そこら辺のケーキ屋より遥かに美味い。
ケーキは結構食べてるほうだがこれはかなり美味しかった。

律「そうだろ？ムギの用意するケーキは美味いんだぜ！」

紬「いえ　そんな…」

何故か威張る部長らしき女子と、謙遜する『ムギ』と呼ばれる女子。

澪「平沢さんと…えっと…」

黒髪の女子が俺の方を見て困った顔をしていた。

智也「ああ、俺の名前はは中川だ」

明久「僕は吉井だよ」

澪「あっ…うんっ」

俺の名前が分からなかったんだろうから教えると、
黒髪の女子はどこかホッとしたような顔をした。

澪「平沢さんと中川君に吉井君はどんな音楽やりたいの？」

改めて黒髪女子が聞いてきた。

唯「えっ！？」

吉井「あっ」

智也「あ～…」

平沢は今まで食べていたケーキから目を離し驚いた声を出した。
明久も今頃目的を思い出したみたいだ。
智也「とても言いにくいんだが。俺達は入部しにきたわけじゃないからな。
それにコイツも実はギター弾けないから退部しにきたんだ」
律「えぇぇ！！！そうなのか！？
待って、あと1人入部しないと廃部になっちゃうんだよ！！！」
智也「マジで！？」
俺、そんなこと聞いてないぞ。
律「うん、マジで！！」
明久「どうしよう智也」
智也「そういってもな……」
律「そんなこと言わずにせめて演奏だけでも聴いてってよ！」
智也「平沢いいか？」
唯「うん！」
智也「じゃあ。聴かせてもらってもいいか？」
律「もちろん！」

そして俺と明久、平沢は演奏を聴いてみた。

翼をくださいのロックｖｅｒか。

にしても、なんだろうこの感覚は・・・新鮮だな。

演奏自体は正直言うとあまりうまくないけど心に響く演奏だったな。

唯「あんまり、うまくないですね！」

平沢が思ったことをそのまんま口にした。

律「ばっさりだー！」

明久「言っちゃったよ」

唯「でも、私、この部に入部します！軽音部に！」

智也「良いのか？」

唯「皆さんなんだかすっごく楽しそうでした！
だから私この部に入部します！！」

律・澪・紬「「「やったーーーー♪♪♪」」」

智也「まぁそれでいいなら俺はいいが…
じゃあ俺は帰るとするかな。もう用事は済んだし。
ケーキご馳走様でした」

明久「じゃあ僕も」

俺と明久は席を立ち帰ろうとすると

唯「え？トモ君もアキ君も一緒に軽音部入ろうよ。
　確かまだ部活入っていないんだよね」

智也「まぁ、まだ部活は決めてないが……」

明久「うん、僕もだけど・・・・・」

そこで部長らしき女子の目がキラリと光る。

律「なら、軽音部に入ろうぜ」

智也「え？い、いや。俺は……」

明久「え？」

唯「そうだよ～トモ君もアキ君も一緒に入ろうよ～」

律「そうだ！そうだ！一緒にやろうよ！！
　今なら『副部長』のポジションが空いてるから！」

そんなポジションは正直いらない

智也「……なんで俺たちを誘うんだ？
　平沢が入部したんだから廃部することは
　なくなったからいいんじゃないのか？」

その疑問をぶつけると…

律「理由は簡単だ！人数増えた方が、演奏の幅が広がるからな！

…あと部費も増えるし…」

おい、今本音が聞こえたぞ

唯「私はトモ君とアキ君と一緒にやりたいな！」

律「澪とムギも入って欲しいよな??」

黒髪女子とムギに聞く部長らしき女子。

紬「ええっ　もちろん！！」

澪「元々、入部希望者だと思ってたしな断る理由はないよ」

あれ?歓迎ムード?

律「ほらほら2人もこう言ってんだからさ〜」

唯「そうだよ〜トモ君！アキ君！」

智也「……」

明久「……」

そうだな。このまま何もせずグダグダするより、1度入ってみるか。

気に入らなかったらやめればいいだけだしな。

・・・・・・・・それにケーキおいしかったしな。

智也「わかった。入部するよ」

明久「僕も入るよ」

律「本当か！？」

智也「ああ、本当だ」

明久「うん、本当だよ」

律・唯「「やったーっ！」」

澪「これで本当に6人目獲得だな！」

紬「はいっ！」

智也「……」

明久「……なんか照れるね／／／」

俺たちが入部するだけで、こんなに喜ぶ彼女達。
なんつぅか…悪い気はしないな…照れくさいけど。

律「そういえば…えっと…名前なんだっけ？」

智也「ああ、ちゃんとした自己紹介はまだだったな。
俺は中川智也だ。これからよろしく頼む」

明久「僕は吉井明久だよ。よろしくね」

律「智也と明久か。じゃあトモとアキだな。
トモとアキは何か楽器できるのか？」

智也「俺はギターかベースなら出来るぞ」

明久「僕はキーボードなら」

律「マジで！凄いの入ってきたよ！」

唯「すごーい、２人とも！弾けるんだ！」

智也「親が昔バンド組んでいてな。一通り教えてもらったんだ」

明久「僕は母親に教えてもらったことがあるんだ」

澪「それでも凄いな」

唯「あ…でも私、全然楽器出来ないし…
　あっ！マネージャーとかどうかな！？」

智也「いや…運動部じゃないんだし…マネージャーは……」

紬「そうだ！」

俺達のの会話から何やら思い付いたらしい『ムギ』が、
こんな提案を俺と平沢にしてきた。

紬「中川君ってギターできるのよね？」

智也「まぁ、ある程度は」

紬「なら、中川君が平沢さんにギターを

教えてあげたらよろしいのではないでしょうか？」

律「それはいい案だなムギ」

智也「え？俺が？いや、無理だろ」

律「大丈夫さ。自分を信じろ。ってか部長命令」

智也「理不尽な」

明久「智也ならできるよ」

唯「よろしくお願いします師匠！」

智也「はぁ～」

俺は済し崩しに平沢にギターを教える事になった。

軽音部での日々1

～後日・教室～

和「へぇ～、唯って軽音部に入ったんだ～」

唯「私、ギター弾くんだよ～」

和「え？唯ギター弾けないでしょ？」

唯「うん、弾けないよ～。でもねトモ君が教えてくれるんだ～」

和「中川君ギター弾けるの？」

智也「まぁたしなむ程度は」

和「大変でしょうけど頑張ってね」

智也「……あぁ」

～音楽室・放課後～

唯「う～ん、おいし～い。」

明久「本当においしいね。僕のカロリーが満たされていくよ」

明久その言葉にお前の命が危ない気がするんだが・・・・・・・

智也「本当においしいな・・・・・・って練習！！
・・・いや、その前に平沢ギターは？」

普通にケーキ食べてる場合じゃなかった。

唯「へっ？」

律「じゃぁ、今週の日曜にギター見に行くか！」

智也「それがいいだろうな。それがないと練習もできないしな」

唯「ねぇ、トモ君のギター見せて！」

智也「あぁ。これだ」

澪「ＥＳＰホライゾン！？」

智也「ああ」

澪「へぇ～、凄くいいギター持ってるんだな！」

智也「あ、あぁ。秋山・・・近い・・・」

澪「ご、ごめん／／／／／」

紬「澪ちゃん・・・中川君・・・」

唯「ムギちゃん・・・？」

律「なぁトモ！なんか、弾いてみてくれよ！」

紬「私も中川君のギター聴きたい！」

明久「僕も聴きたい」

智也「別に良いけど・・・・・・あまり期待するなよ」

俺はギターを担ぎ、1曲演奏する。

紬「中川君すご～い♪」

唯「本当に凄いねトモ君」

明久「智也は本当に凄いね」

澪「さすがは、中川・・・・・・智也・・・だな／／／」

恥ずかしいなら名前で良いのに。ってか名前を呼んだだけで顔赤くなるのか？

そりゃ少し恥ずかしいかもしれないけどそこまで？

ちょっと聞いてみるか・・・・・・・

智也「なぁ田井中？」

律「なに？てか『律』で良いって言ってんじゃん」

昨日、俺と平沢は改めて自己紹介をし、

その時に田井中が俺の事を『トモ』と呼びだした。

それを聞いた平沢が『トモ君のほうが良い』なんて事言ってたが
まぁ呼び名なんて今さらどうでも良いが・・・・・・・・
もう平沢であきらめた。大丈夫。俺が慣れれば言いだけの事だ！
で、その折りに平沢と田井中が『名前で呼べ』と言ってきたが
さすがに女子の名前を呼び捨てで呼ぶのは少し抵抗がある。
だから、今は苗字で呼んでいるのだが・・・・・・・・

智也「まぁ気にしないでくれ。それよりちょっといいか？」

律「結構重要なんだけどな……」

手招きすると愚痴りながらも俺のそばに来た
田井中に秋山に聞えないように小声で話す。

智也「（昨日から思っていたんだが秋山って
もしかすると人見知りとかするタイプか？）」

律「（ん？あぁ　するよ。それに今なら人見知りだけじゃなく、
恥ずかしがり屋、寂しがり屋、怖いものはダメ、
負けず嫌いという４点セット付きだ）」

智也「（…なんだよ『今ならお買い得』みたいな言い方は…）」
なるほど、そんな性格してたんじゃ昨日あったヤツの
名前を呼ぶだけで赤面するわけだ。しかも俺男性だし。

チラッと秋山を見てみると…

澪「…？」

『何の話をしてるんだ』と言わんばかりの表情をしていた。

律「（それに…）」

智也「（ん？）」

律「（トモが不機嫌そうな顔してるからじゃないのか？）」

若干ニヤけながらそんな事を言ってくる。

智也「（昨日も言ったがこの目はは生まれつきだ！
傷は小学校の時に出来たんだ！
俺だって・・・俺だって・・・こんな顔・・・）」

律「ちょっ！？ひとまず落ち着けトモ」

智也「これが落ち着いてられるか！？」

律「もし生まれつきだとしてもそんな顔してたら
相手に誤解されるよな？という事で笑ってみましょう！さぁ
笑うんだ！」

そう言って俺の頬に手を伸ばし無理矢理笑わせようと引っ張る。

グニッ

智也「コラ…何する」

澪「律ッ？」

律「笑顔の練習だよん♪」

んなことを笑顔で言ってくる田井中。

そして急に俺の頬を引っ張り出した田井中に困惑の声をあげる秋山。

とりあえずやられっぱなしは性に合わないので反撃に出る事に。

グイッ

智也「田井中こそ少しは女らしくしたらどうだ？…この口調とかな」

そう言い田井中の頬を引っ張る俺。

澪「中川君ッ？」

律「にゃにお～う！このツリ目！」

智也「カチューシャ」

律「ヤンキー」

智也「俺はヤンキーじゃねぇ！」

お互いの頬を引っ張り合いながら口論？する俺達。

…と

澪「…クスッ　あはは！」

笑い声が聞えてきた。

澪「あはははっ！」

智也「ん？」

律「…澪？」

澪「ご、ゴメン…なんだか2人がおかしくって…あははっ！」

目に涙を浮かべながら俺達を見て笑う秋山。…ツボに入ったようだ。

智也（…笑うと可愛いな）

初めて秋山の笑顔を見た。

律「全くトモのせいで澪に笑われたじゃないか～」

同じく笑いながらそんな事を言う田井中。

智也（…いや　先に仕掛けたのお前だろ）

そう思ったが口に出さなかった。

せっかく秋山が笑ってんだそれはヤボだな。

そして今度の日曜日、皆で平沢のギターを買いに行く事になった。

軽音部での買い物

～待ち合わせの商店街～

休日の街を1人で待っている。
今日は平沢のギターを購入するために、
軽音部員と待ち合わせしているためである。
まだ時間があるので音楽を聴きながら待つことにした。

数十分待つこと

全員揃ったので楽器店に向かうため俺達は商店街を歩いていた。
ちなみに女性陣は横一列で歩いており、
俺と明久はその列後ろで歩いている。
何故かって？そりゃ恥ずかしいからだよ。
女子４人に対し男２人だぜ！
しかも中学時代女子と買い物なんて行った事ないから恥ずかしいし。

紬「お金は大丈夫だった？」

唯「うん。お母さんに無理言って５万円前借りさせてもらったんだ」

智也（それだけあれば何とかなるな）

琴吹と平沢の会話が聞えてきたので、俺がそんな事を考えていると…

唯「ちょっと見るだけ～」

平沢の声が聞えた。

智也（何だ？）

明久「どうしたんだろ？」

とある洋服店に突入する平沢。

呆れながらもちゃっかり付いて行く田井中。

笑顔で洋服店に足を運ぶ琴吹。

その場に残る秋山。

こんな状況だった。

智也「なぁ　秋山？」

澪「何…中川？」

智也「帰っていい？」

澪「ゴメンそれだけは勘弁して……」

秋山は涙目になりながら懇願してくる

智也「冗談だ」

とりあえず突っ立ってる訳にもいかないので…

智也「とりあえずアイツ等の事頼んでいいか？
俺はそこの本屋にいるから」

澪「え？行かないの？」

智也「いや、だって、あそこは女性の服を扱う店だろ。
男子の俺らはさすがに入りにくいし……だから、頼む秋山。
そこは察して欲しい」

澪「そうだな。わかった　すぐに連れてくるから」

智也「…了解」

そう返事し、秋山は平沢達の後を追い、俺と明久は…本屋に向かった。

おそらく秋山の性格上すぐって言うのは無理だろうしな。

……

本屋で新刊のチェックをし、音楽雑誌と漫画を立ち読みしていたら…

澪「お待たせ…」

申し訳なさそうな顔をした秋山がやって来た。

智也「あぁ、大丈夫。ひとまずお疲れさま」

パタンと雑誌を閉じながら答える。

智也「さぁ　行こうぜ」

澪「うん…」

明久「お疲れさま秋山さん」

今度こそ楽器店へ……

……が、その後も平沢と田井中、便乗する琴吹に振り回され、

雑貨店、デパ地下、ゲーセン等々……最終的には秋山も楽しんでいた。

まぁ俺も明久も楽しんでいたけど。

今度は休憩のため、喫茶店に入店する俺達。

……

唯「はぁ～疲れた～」

律「へへ～買っちった～」

紬「楽しかったですね～」

口々に言う面々。更に…

唯「次ドコ行こっか～？」

明久「ドコがいいかな？」

平沢が目的地は1つしかないのにそんなこと言う。

なので…

智也・澪「「楽器だ　楽器」」

と、俺と秋山の声が重なる。それを聞いた平沢は…

唯「あっそうか　何か忘れてると思ってたら…ギターだ」

智也「おい、お前ら寄り道しすぎなんだ」

流石にツッコまざるを得ない。

律「でも、智也だって楽しんでたじゃないか。

　その手荷物見ても説得力ないぞ」

智也「うっ……」

俺の隣にはゲーセンでとったぬいぐるみなどが入った袋が置かれてあった。

いや、だってゲーセン行ったんだぞ。

ブツとらないと……しかも今日は運よく結構取れたし。

…紆余曲折ありながらもようやく本来の目的地に向かうことに…

――――――――――

～10GIA～

澪「女の子ならネックが細いやつがいいぞ」

唯「あ、このギターかわいい♪」

智也（聞いてないな・・・）

明久「それ、25万するよ」

唯「さすがに手が出せないや・・・」

智也「向こうに安いやつがあるぞ。

ストラトとかテレキャス系とか色々・・・・」

智也（動く気配なしだな・・・）

紬「そのギターが欲しいの？」

唯「うん・・・・・・」

澪「私も、あのベースが欲しかった時こんな感じだったな～。」

回想からすると、何か秋山のは違う気がするような・・・・・・・・・。

律「私も、あのドラム買うために
値切って値切って・・・・・・・・・」

店員さんの涙が眼に浮かぶ・・・・・・・・・・

澪「店員さん、泣いてたぞ。」

やっぱりな。

紬「あの～、値切るって？」

律「欲しい物を手に入れるためにマケてもらうことさ！」

そこはドヤ顔するとこなのか？

紬「何か、憧れます♪」

智也「いや、憧れるか？」

律「じゃあ、みんなでバイトするか！」

澪「バイトってどんなのするんだろ・・・・・・・・・・」

～音楽室～

律「う～ん、じゃ、ティッシュ配りとか？」

澪「・・・・・・・・・無理そう・・・・。」

明久「ファーストフードとかは？」

澪「それも、無理そう・・・」

智也「じゃあ、これならどうだ？」

唯「交通量調査のバイト？」

智也「これなら日給もそこそこ良いし、
　短期バイトだから部活にも影響しないだろうしな」

澪「うん、これなら大丈夫！」

こうして、何のバイトするかは決まった。

軽音部での買い物（後書き）

少し皆さんにお聞きしたいのですが
バカテスキャラとけいおんキャラのカップリングですが、
どのカップリングがいいなとか希望はありますか？
これはまだカップリングを決めていないので
その参考にしたいと思っています。
また、その時ハーレムありにすべきかも悩んでいます。
その件も含めて感想をいただけると嬉しいです。

アルバイト

～教室～

和「バイト？」

唯「うんっ！ギター買うために！軽音部のみんなも協力してくれるんだ♪」

和「え！？みんなを巻き込んで！？」

唯「うんっ♪」

和「じゃあ…中川君も？」

唯「？…そうだよ、トモ君も♪」

和「そうなんだ…意外…」

智也「ん？どうしたんだ真鍋？俺のこと見て？
何か俺の顔についてるのか？」

和「いや…中川君が唯のためにバイトするって少し意外だなって思って」

智也「そうか？」

和「中川君ってなんだかめんどくさがりな感じがしたから…」

智也「失礼だな…」

そりゃ確かに少しはそうだがそこまで言われる筋合いはないぞ。

智也「まぁ、今は軽音部のメンバーだからな。
メンバーが困ってるんだから手伝わないとな。
それに俺は平沢にギター教えないといけないんだから
頼まれたことはちゃんとやらないとな」

和「クスッ、そうなんだ。じゃあいつか私も何か頼もうかしら」

智也「・・・俺に出来る事なら」

唯「トモ君は優しいからね♪」

陽一「そうなんだよ智也は優しいからね～」

と、平沢と……

智也「…誰だっけお前？」

陽一「お前の親友の春原陽一！！親友の名前忘れるなよ！！」

智也「え？親友？誰ソレ？」

陽一「……」

…ん？　黙った…？

いつもなら騒音問題レベルの声で反論してくるのに…

陽一「ふぅ？」

と息を吐き『やれやれ』と手を上げ首を左右に動かす陽一。

…何だコイツ？

陽一「こうゆうところが素直じゃないんだよな？

良いかい？唯ちゃん、和ちゃん。

コイツはあんな事言ってるけど、照れくさいだけなんだよ」

智也「……」

唯「うんうん」

和「若干そんな気はするわね」

陽一「でしょ？つまり智也は…」

そこで俺を指差して

陽一「ツンデ――」

智也「うせろっ！！」

シュダダダダダダッダダダダっ！！　　１７６ＨＩＴ

俺は瞬時に陽一の懐に入り込み、ＣＬ○ＮＮＡＤの智代並に蹴りを叩き込む。

陽一「ウゴァ！！」

２９６ＨＩＴ

智也「誰が何だって？もう一度言ってみろ」

口を押え悶え苦しむアホにすごみを利かせる。
するとアホは…

陽一「…ツ、ツンデレ…」

シュダダダダダダダダッダダダダダっ！！

俺は再びを陽一に向けて蹴りを繰り出し黙らせた。

陽一「ウベェ！！」

智也「黙ったか」

唯「陽一君が死んじゃった？！！」

和「多分大丈夫よ」

慌てる平沢とやはりどこか冷静な真鍋。
ちなみに真鍋の言う通りだな。
コイツはG並みの生命力を誇るからな。

智也「あっ、そうだ。俺このバカに用事があったんだ」

唯「なんの用事？」

智也「今度のバイトこいつにも手伝わせようと思ってな。
まぁコイツならバイトの日当日に呼び出しても大丈夫か」

～バイト当日・とある道路前～

週末の休日。
集合場所に集った俺は
スタッフから預かっていたカウンターを皆に配る。
智也「じゃあ４人は２人ずつのペアで
１時間ごとに交代しながらやってくれ」
澪「え？中川と吉井はどうするんだ？」
智也「俺と明久は別の場所でやるから。
それにスケット呼んでるから大丈夫だ」
唯「それって陽一君のこと」
智也「そうだ。じゃあしっかりやれよ。
秋山大変だろうけど頑張ってな。何かあれば俺に連絡してくれ」
澪「ああ、わかった」
俺はこの場所を４人に任せ、別の場所へと向かう。
陽一「ねぇ？なんで僕がここにいるわけ？」
智也「そんなの簡単だ。手伝わせるためだ」

明久「当たり前の事聞かないでよ」

陽一「僕、一言もやるなんて言ってないよね」

智也「大丈夫。お前の意見なんて聞く耳無いから」

陽一「鬼！悪魔！！」

智也「……上手くやったら部活のメンバーに
　お前のこと紹介しないわけでもないが」

陽一「僕達親友だろ！手伝うに決まってるじゃないか！」

本当に調子いいな。

1日目は陽一をからかいながら終了した。

2日目は陽一（バカ）が途中で逃亡しようとしたが、
『男が約束破ると女子にモテないぞ』と冗談交じりでいうと、すぐに戻ってきた。

3日目は琴吹が急用という事でこれなくなったので、
ここを明久と陽一に任せ女子のスケットに向かった。

そして、

日給８０００×３×７＝合計１６８０００円

まだ足りないな。

智也「さすがに疲れた」

紬「昨日は本当にすみません。家の用事でそうしても抜けられなくて」

智也「いや、家の用事なら仕方ないさ。でも、まだ足りないな」

明久「どうする？」

澪「あと何回かバイトするか・・・」

唯「あの・・・」

智也「ん？どうした平沢？」

唯「やっぱり、これはみんな自分のために使って！」

智也「いいのか？」

唯「うん・・・」

明久「けど、それじゃ欲しいギター買えないよ？」

智也「じゃあ陽一の分だけ使うとするんだ」

陽一「なにっ！」

唯「早く、皆と練習したいから・・・。
だから、もう一度楽器店に付き合ってくれる？」

こうして、軽音部＋@によるバイトでギター購入作戦終了

～10GIA～

智也「ムスタングとかどうだ？一応、初心者向けのやつだぞ。って・・・・・」

結局、あのレスポールに行くのか。
よっぽど気になるんだな。

唯「あっ…　エへへ…」

俺達の視線に気付き、曖昧に笑みを浮かべる。

澪「よほど気になるんだな」

律「ヨッシャ！やっぱまたバイトを…」

智也「だな。今度はより金が良いところを探すか」

明久「そうだね。今度は何する？」

紬「あっ…　ちょっと待ってて？」

智也「ん？」

秋山の言葉に田井中が再びバイトをするかと意気込んで

俺がバイト先を探そうとしよう時
琴吹が何かを思い付いた様子で店員の所に歩いて行った。

店員と接触し話し出す琴吹。

澪「…何やってるんだ？」

智也「さぁ…？……あれ？なんだか店員が慌てだしたぞ？」

澪「何があったんだ？」

智也「……わからん」

秋山と会話をしていると店員と話していた琴吹が戻ってきた。

紬「そのギター5万円で売ってくれるって♪」

皆「「「「「……」」」」」

律「えっ！？マジで！？」

唯「何！？何やったの！？」

智也・澪「「……」」

琴吹の口から突如告げられた『5万円価格宣言』に
驚愕の声をあげる田井中と平沢。
そして絶句状態の俺と秋山と明久。

だってこれ２５万するんだぞ・・・・・・それを５万って

紬「このお店、実はうちの系列のお店で」

智也「…マジかよ…」

唯「そ、そうなんだ…ムギちゃん、ありがとう！
　残りはちゃんと返すから！」

何者なんだ琴吹って？
まさか本当に令嬢なのか・・・・・・・まさかな。

平沢は感激の表情でギターの前に座り込む。

律「よかったな？唯」

唯「うんっ！」

智也「これで楽器が揃ったな」

紬「そうですね～」

律「よしっ！唯！家に帰ったらしっかり練習するように！」

唯「まかせといて！りっちゃん隊長！！」

互いにビシッと敬礼する田井中と平沢。

こうして、平沢は何とか念願のレスポールが手に入ったとさ。

めでたし、めでたし

～平沢家・ｓｉｄｅ～

遂に、あのギターが手に入ったんだ！
これからは、いっぱい練習しなきゃね！！

唯「ギュィィィン！！！
　うわぁ、ミュージシャンみたいでかっこいい！」

憂「お姉ちゃん、うるさい・・・」

唯「あ、ごめん憂・・・。つい、興奮しちゃって・・・。」

だって、凄く欲しかったギターが手に入ったんだよ！
名前は、何ていうんだっけ？
一日も早く、トモ君に追いつかなきゃ！
色んなこと教えてもらわないとね！

～後日・音楽室～

皆『おおおぉぉ～～！！！』

智也「ギター持つとそれっぽいな」

律「似合ってるぞ、唯！」

唯「えへへ・・・ねぇ、ライブみたいな音出すにはどうするんだっけ？」

智也「アンプに繋ぐんだ」

平沢は、レスポールをアンプに繋いで弦を適当に弾いた。

ギュィィィン！！！

それは、軽音部というなのライブの始まりの音に聞こえた。

澪「やっとスタートだな。私達の軽音部・・・」

智也「あぁ。そうだな。」

明久「頑張らないとね」

律「夢は、武道館ライブ！！！・・・・・・卒業までに！」

智也「今のままじゃ無理だろ」

律「おい！」

俺らがグダグダ喋っていると、平沢が・・・

唯「アンプで音を出すのはもう少し先だね・・・。」

智也「ば、馬鹿、ボリューム下げろ！！！」

唯「へっ！・・・ギーーーーーン！！！！！・・・・」

俺は、とっさに耳を塞いだが平沢は至近距離で直に聴いたのでグロッキーだ。

澪「アンプから抜く前に、ボリューム下げないとこうなっちゃうんだよ～・・・・」

唯「それを先に言って・・・・・・・・・・」

智也「・・・あっぶねェー」

唯「トモ君ずるい～・・・・。」

相変わらずのグダグダさ・・・・。

けど、ようやくスタートなんだよな・・・俺らのバンド。

アルバイト（後書き）

まだまだカップリング案募集中です。
色々案をいただけると嬉しい限りです。
もちろん智也と明久だけではなく
秀吉や康太でもかまいません！
これからも応援よろしくお願いします。

軽音部での日々2

～放課後～

和「唯」

唯「あっ　和ちゃん」

和「一緒に帰ろう」

唯「ゴメン？　部活に行かなきゃいけないんだー」

和「そうなんだ…それじゃあ仕方ないね。
ちゃんと部活頑張っているのね」

唯「今日はムギちゃんが美味しいお菓子持ってきてくれるんだ～」

和「えっ？」

智也「……目的違うだろ」

唯「あっトモ君！」

智也「じゃあ部活行くぞ」

唯「うん！じゃあ和ちゃんまたね」

智也「じゃあな」

和「うん　またね唯、智也」

真鍋に別れを告げ、部活に行くために教室を出る。
もちろん向かうは軽音部室。

――――――――――

ガチャ

唯「こんにちは～」

智也「ちわっす」

挨拶をして音楽室に入る。

中には俺達以外の４人が既にいた。

律「ようっ！」

澪「こんにちは」

紬「いらっしゃい～」

明久「いらっしゃい」

と4人から挨拶が返ってくる。

紬「唯ちゃん、智也君。紅茶は熱いのと冷たいの、どっちが良い？」

と琴吹が聞いてきた。

唯「私、熱いの！」

智也「俺は冷たいので」

俺と平沢は琴吹の質問に答え席に着く。
席には田井中と秋山、明久が座っており、
3人の前にはティーカップが置いてあった。

ってか俺今普通に答えたけど

智也「なぁ　秋山」

澪「えっ　何？」

秋山は話がフラれるとは思わなかったんだろう。
少し驚いていた。

智也「ここは軽音部だよな？」

澪「あーっ、うん……そうなんだけど…」

俺の言いたい事がわかったんだろう、苦笑いを浮かべ肯定する。

智也「なんでお茶が出てくるんだ？」

明久「いいじゃん別に。僕としてはカロリーが取れるだけで幸せだよ」

智也「明久はまずはゲームとかの出費を抑えろよ」

明久「………今月は誘惑が多くて」

智也「今月も（・）だろ……」

・・・・・・・・・・・・

唯「ねぇねぇ　何で澪ちゃんはギターじゃなくてベースをやろうと思ったの？」

席に着き琴吹が淹れる紅茶を待ってると平沢が秋山に質問をする。

澪「だってギターは……は、恥ずかしい…」

智也「恥ずかしい？」

澪「ギターってバンドの中心って感じで、先頭に立って演奏しなきゃいけないし、観客の目も自然と集るだろ？

……自分がその立場になるって考えただけで…」

ボフンッ！

唯「澪ちゃん！！」

頭から煙を出し、倒れる秋山。

智也「おい！大丈夫か秋山！？」

律「それより言った通りだろ？」

智也「何が？」

律「これが、澪の持つスキルの１つ『恥ずかしがり屋』だ！」

いや、確かに前にも言ってたが何故にドヤ顔なんだ？

にしても・・・・・・

智也「繊細過ぎやしないか？想像しただけで、アレって……」

律「そうなんだよな～。少しでも直ってくれると良いんだけどな～

どうするかな～。

　いっそトモに任せてみるか（ボソッ）」

田井中は秋山の繊細さが心配らしい。

…意外と友達想いなとこあるんだな……
最後は何かつぶやいていたが……

紬「お待たせ～唯ちゃん！智也君、お茶が入りましたよ～」

俺と平沢の前に紅茶が置かれる。
すると平沢は今度は琴吹に…

唯「ムギちゃんはキーボードうまいよね。キーボード歴長いの？」

紬「私、４歳の頃からピアノを習ってたの
　コンクールで賞をもらったこともあるのよ」

唯「へっ！？へぇーすごいねぇ！」

確かにそれは凄いな。
コンクールで賞をとるくらいの実力を持ってるなんて……

唯「アキ君はキーボードいつから習ってるの？」

今度は明久に質問してきた。

明久「僕は小学校の時かな。母にすすめられてね。
　中学のときまで少しやってた程度だから、琴吹さんと比べると全然だよ」

唯「それでも少しはできるんだよね。凄いよ」

明久「そうかな」

紬「さぁ　いただきましょう」

気がつけば目の前に、ケーキやらクッキーが並べられていた。

…だからここ軽音部だよな？

てか良いのかよ、学校でこんなことして…

唯「疑問に思ってたんだけど…」

平沢、やっとお前も気付いたか……

そりゃそうだ。目の前にこんだけのもんが並んだらいくらなんでも気付くよな…

唯「この部室ってやけに物がそろってるよね～。ティーカップとか」

明久「あ、そういえばそうだね」

智也「そっちかよッ！！って明久お前もか！？」

唯「えっ！！トモ君どうしたの！？」

明久「い、いきなり大きな声出さないでよ。ビックリするじゃないか」

智也「いや…わるい…やはり俺の考えは甘かったんだと
　　再び実感してしまって声をあげてしまった…」

ここでは多分俺の勘違いなんだ。

これが正しいんだ。そうに違いない！ってかそう思おう！

明久「で、ここの物ってどうしたの？」

紬「ああ、それは私の家から持ってきたの」

智也「自前なのか！？」

その後俺は彼女達の会話を紅茶を飲みながら受け流していた…

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4050z/

バカとけいおん！と召喚獣

2011年12月25日12時49分発行